

Sons and Lovers に見られるロレンス文学の原点

岩 田 桃 子

序章

ロレンスの出世作である *Sons and Lovers* (1913) は、彼が母の死を契機として自らの母子関係の葛藤に正面から取り組んだ自伝的小説である。自身の育った環境が題材となり、主人公ポール・モレル (Paul Morel) が母親と精神的に強い絆で結ばれているがゆえに、自分の人生を一人の人間として上手く築いていけない苦悩が切々と描かれている。

この *Sons and Lovers* は自伝的小説であるので、ロレンスの作家としての独自の思想が描かれ始めるのは、次作 *The Rainbow* (1915) からであると多くの研究者は述べている¹。確かにロレンス自身、*The Rainbow* を書くにあたってエドワード・ガーネットに宛てた手紙の中で、“It is very different from *Sons and Lovers*: written in another language almost.”² “I have no longer the joy in creating vivid scenes, that I had in *Sons and Lovers*...I have to write differently.”³ と述べ、技法の点で以前の作品 *Sons and Lovers* との違いを明らかにしている⁴。

このように、*Sons and Lovers* は技法、思想の面で他作品と繋がりが無いように論じられる。しかしながらこの作品は、彼の生涯のテーマが原石となってあ

¹ 『息子と恋人』は傑作とっていいものであるけれども、ロレンスの生涯にわたっての主題と技法はまだあらわれていないのであって、この自伝的作品は自伝的であるためにロレンスと引き離しては考えられないのだが、独自の作家としてのロレンスの軌跡は『息子と恋人』ではなくて、そのつぎに書かれた『虹』を出発点とする。」小川和夫p.813

² Moore, 1962, p.259

³ Moore, 1962, p.263

⁴ 原良子による

ちこちに散りばめられたものである。そのテーマとは、自我を保ちつつも他と結びついて、全体の一部となる⁵、そのような生き方の追求である。小論は、*Sons and Lovers*に見られるこのロレンスの原点について考察を試みるものである。

第1章 無意識

ロレンスの思想に大きく関わるテーマに「無意識」がある。これは自意識を超越した感覚と言い換えることができる。無意識は、自我を保ち、それを否定せずとも、自我から解放された深層的なところで他人とつながることを可能にする。小川和夫の言葉を借りれば、根源的な接触を果たすために無意識、宇宙の生命とつながりあった根源意識の生活に帰らねばならぬ⁶というのがロレンスの思想である。本章では *Sons and Lovers* の主人公ポールが無意識という感覚を知り、それが彼を理想的な「生」へと掻き立てる様子を跡付ける。

ポールは、母親の自己同一視ともいえるほどの愛情を注がれて育った人間である。彼の母親への愛情は、彼に影響を与えるという次元を通り越して、その愛情がポールの意思全てを支配し彼そのものになっている。すなわち、ポールは母親を前にすると、ポールであって、ポールでなくなってしまう。彼の恋人ミリアムもまた母親と同様に精神性の強い人物である。ミリアムはポールの神聖さとそれを宿すその魂だけを求め、同時に彼の魂は自分を求めていると確信している。そのために、彼の感情は彼女にとって大して関心を払う対象にならない。ポールは、彼女に対する愛情でさえも受け止めてもらえず、行き場のない感情と共に一人孤独に取り残されてしまう。

このように、母親にしてみれば、愛情のはけ口であるポールの存在、ミリアムにしてみれば、彼の霊的な存在こそ重要で、それ以上はポールという人間を必要としていない。彼女たちが作り出すその環境が、ポールにとっては自分の

⁵ 小川和夫, p.817

⁶ 小川和夫, p.817

生の全体性を獲得する妨げになっていることが明らかである。

このように一人の人間として生きるということを未だ知らないポールであるが、あるとき彼に「無意識」という感覚と出会う瞬間が訪れ、彼は理想の生を知る。彼が出会った「無意識」は、「死への到達」(reaching-out to death) という言葉で以下のように表現されている。

She put her hands over him, on his hair, on his shoulders, to feel if the raindrops fell on him. She loved him dearly. He, as he lay with his face on the dead pine-leaves, felt extraordinarily quiet. He did not mind if the raindrops came on him: he would have lain and got wet through: he felt as if nothing mattered, as if his living were smeared away into the beyond, near and quite loveable. This strange, gentle reaching-out to death was new to him. (*Sons and Lovers*, p.324)

ここに描かれているのは、無意識という感覚に触れ、自由な世界に足を踏み入れたポールの喜びにも似た安堵感である。今まで強靱な精神を持つ母親とミリアムに鍛えられて成人になったことで、ポール自身の精神も強固なものとなっていた。自意識を強く持ち二人と張り合うことは生きることそのものであったため、意識が消えゆくその感覚はポールにとって生の消滅に似ている。消えてゆく彼の生が向かう先は、彼の知り得ない、想像の及ばない遠いところである。同時にそれは身近なところでもある。日常的で身近なこの感覚は、とても愛おしく、生を間近に感じさせる。だからこそ彼は、自らに訪れたその「死へ到達する」(reaching-out to death) 未知の感覚を、「優しい」(gentle) と感じる。この段階でポールが感じる無意識が、以下の言葉で述べられている。

To him now, life seems a shadow, day a white shadow; night, and death, and stillness, and inaction, this seemed like *being*. To be alive, to be urgent and insistent—that was *not-to-be*. The highest of all was to melt out into the darkness and sway there, identified with the great Being. (*Sons and Lovers*, p.325)

「夜」「死」「静寂」「静止」こそ「在ること」(*being*)、すなわち生の実態である。精神的に生きて、執拗に何かを求め、意志を突き通すのは、実際は狭隘な意識の活動に過ぎない。つまり、意識的な生を生きているだけである。“*not-to-be*”はそのことを意味している。この認識に至ったポールにとっては、

今までのように精神的に生きることは、もはや儂い影のように生きることにように思える。こうしてポールは闇の中に溶け入り「巨大な存在」(the great Being)とひとつになる。

自意識という意識の解放の感覚が、理想的な人生の在りようであると感じるポールの姿は以下の一節に示されている。

There was a sound rain everywhere, smothering everything.
'I feel so strange and still,' he said; 'along with everything.'
'Ay,' she said patiently.
He seemed again unaware of her, though he held her hand close.
'To rid of our individuality, which is our will, which is our effort—to live effortless, a kind of conscious sleep—that is very beautiful, I think; that is our after-life—our immortality.'
'Yes?'
'Yes—and very beautiful to have.'
'You don't usually say that.'
'No.' (Sons and Lovers, p.325)

ここには、理想の生を見つけ出したポールの感動が描かれている。「意欲」(our will) や「尽力」(our effort) が象^{かたど}る「個」(our individuality) に捕らわれずに生きることを、まるで目を覚ましつつも心安らかに眠るようだと例え、それを美しいと彼が表現することから明らかである。さらには、「個」から解き放たれた様子を、自分たちの人生までも超越した“our immortality”という言葉で表現し、それを再度美しさという言葉で説明する。ここから、自意識の解放が、美しいものとして彼の中に根付いたこと、その確信は彼の人生の理想とすることが読み取れる。

このように、初めて無意識の世界を感覚し、おぼつかなくとも自分の言葉で自分が体感した無意識を表現しているポールの姿は、すなわちロレンス自身と重ねることができる。この時点で未だロレンスの中で確立されていたとは言い難い⁷「無意識」という概念が、Sons and Loversの中では、ポールのたどたど

⁷ ロレンスの無意識の思想は『精神分析と無意識』(Psychoanalysis and the Unconscious, 1921)『無意識の幻想』(Fantasia of the Unconscious, 1922)等に描かれており、これらのエッセイは「神経叢の四元論」を中心に論が展開される。この四元論が形となって姿を現すのは『古典アメリカ文学研究』(Studies in Classic American Literature, 1923)の初校や『恋する女たち』(Women in Love, 1920)である。

しくも確信に満ちた言葉で言及されていることが明らかとなった。

第2章 血の交感

ロレンスの作品にたびたび出てくるテーマに、「無意識」と重ねて「血の交感」(blood intimacy)が挙げられる。これは、原始的生活に憧憬を抱くロレンスの思想⁸によるものである。彼はその思想にもとづき、文明の産物ともいえる意識や知識に縛られ、体の奥底から湧き出て来る衝動に従って自発的に行動出来ず、ついには本来備えている生まで忘れてしまった現代人の姿を指摘し、警鐘を鳴らし続ける。この血の交感もすでに *Sons and Lovers* のなかで言及されていて、その感覚を体験することでポールはさらに自分の生の確かさを実感し、自分の理想とする生き方を改めて確認するのである。本章では、彼がその血の交感の感覚と出会い、豊かな生の感覚に身を浸す様子を跡付けていく。

ポールにそのときが訪れるのは、彼の新たな恋人クレアラとともにいるときである。彼はミリアムとの関係では叶わなかった、意識に阻まれない自由な生命の広がりや相手とともに感じるという強い生の感動を味わう。

ポールがその感動の前兆として感じたのは、以下に見られる実態の掴めない力である。

All the pewits were screaming in the field. When he came to, he wondered what was near to his eyes, curving and strong with life in the dark, and what voice is speaking. Then he realized it was the grass, and the peewit was calling. The warmth was Clara's breathing heaving. He lifted his head, and looked into her eyes. (*Sons and Lovers*, p.399)

⁸ 「人間がまだ相互に緊密な肉體的連帯感のうちに生きてゐたころ、あたかも空とぶ鳥のむれのやうに堅い肉體の一體感に結ばれ、個人としてはほとんど分離しがたいやうなあの古代の部族連帯感意識をもつてゐた時代にあつては、民族はコスモスと、いはゞ胸と胸を相觸れ、裸のまゝにコスモスと抱擁しあつてゐた。コスモス全體は生々と脈うち、人間の肉と肌を觸れあつて、兩者の間には神といふやうな觀念の介入する餘地は全然なかつたのである。が、しかし、やうやくにして個人はみづから分離を感じ始め、自我意識に陥ちこみ、やがて乖離感に捉はれるに至つたとき、これを神話的にいふなら、生命の樹のかはりに知慧の實を喰ひ自己の孤立と乖離を知つたとき、こゝに始めて神の概念が生じ、それは人間とコスモスの間に介入せんとしたのであつた。」ロレンス『現代人は愛しうるか』、p.154

実態は掴めないが、形や音が醸し出す闇の中に漲る力強い生の力を感じ、ポールは命の息吹に触れたような感動に打たれる。その正体が、遠くに見える草や、鳴いているタゲリの声と、クレアラの呼吸の温もりが一つになったものだと気付き、彼は顔を上げ彼女の眼を覗き見る。夜の彼方から吹いてくると感じていた強い生の風が、実は彼女から吹いてきていたことにポールが気付いた瞬間である。

... They were dark and shining and strange, life wild at the source staring into his life, stranger to him, yet meeting him; and he put his face down on her throat, afraid. What was she? A strong, strange, wild life, that breathed with his in the darkness through this hour. It was all so much bigger than themselves that he was hushed. They had met, and included in their meeting the thrust of manifold grass-stems, the cry of pewit, the wheel of the stars. (*Sons and Lovers*, p.399)

上の一節は、ポールの見知らぬ彼女の暗く輝く瞳が、そしてそこに潜む彼女の野生の命が彼の命を見つめている様子を伝えている。それを目にして彼は、彼女の存在自体が分からなくなる。ただ分かるのは、強くて見たことのない野生の命が、この時暗闇の中で彼と共に息衝いていたことだけである。そしてそれは、ポールとクレアラを超えた計り知れない何かである。それを感じ取った時ポールは、自分たちが自分たちの出会いを、植物や、鳥の鳴き声や、星の動き、そのすべての流れの中でともにしていたことに気付く。今まで感じたことのないような力強さを、実は自分たちの生命そのものが湛えていたことを知る。

... To know their own nothingness, to know the tremendous living flood which carried them always, gave them rest within themselves. ... They could let themselves be carried by life, and they felt a sort of peace each in the other. Nothing could nullify it, nothing could take it away; it was almost their belief in life. (*Sons and Lovers*, pp. 399-400)

ここに描かれているのは、二人の感動が彼らの中に確信として根付いた瞬間である。それは、二人で共有した自然との同化の感覚が、生に対する信頼となったことから明らかである。二人は自分たちをどこかに運んでいる大いなる生命の存在を知り、個としての存在に何の意味もないことを悟り、安らぎに包まれる。

大きな命の流れの一部に溶け込むというポールのこの意識は、まさに文明化され機械化された社会が引き起こす病理を憎み、常に原始生活への憧れの炎を湛え続けるロレンスの意思が反映されたものである。このように *Sons and Lovers* には、後に確立されるロレンスの思想「血の交感」が描かれているといえるのである。

第 3 章 生

後々の作品で「無意識」や「血の交感」は、自我を超えた人間関係を構築するための概念として描かれる。本章では、これらが *Sons and Lovers* においてはどのような意味を持つてくるのかを考察する⁹。

「無意識」や「血の交感」によって深層意識における他人との接触が果たされる。この作品においてはその接触がきっかけとなり、主人公がより緊密な人間関係を希求することが重要な意味を持つ。望み求めることがすなわち、ポールの生きる力となる。ポールが母親とミリアムの間で彼の全体性のほんの一部である魂だけを必要とされ、生身の生を、つまり生きているという現実を認められずに育ってきたことは第 1 章で述べた。しかしポールは、「無意識」や「血の交感」などを通して他人との深層的な接触を知り、他人と触れ合うことによって初めて自分の生があることを知るのである。ポールはこの体験を重ねることにより、生まれ落ちた環境のもとでただ単に時が流れゆくのが人生ではないことに気付く。今、目の前にあるものだけが人生のすべてではない。新たな可能性を求め、模索し、その手に確かなものを掴み生きていくことこそが、生を受けた人間の進むべき道である。その道を今まさに歩んでいるポールの姿

⁹ *Sons and Lovers* には他にも、後に確立されるロレンスの思想「血をわけた友情」(blood-brotherhood) が描かれている。小論では「無意識」と「血の交感」のみを扱っている。「男性が女性との関係だけに終始していると、「大いなる母」としての女性本能は、やがてややもすれば男性を征服して、女性への奉仕者たらしめる。かくて男性は自我を失った空虚な存在となる。これを防ぐためには男性は女性から独立している時がなければならぬ。」中橋一夫p.84

が描かれた一場面をここで紹介する。彼はある時母親に次のような言葉を掛けられる。

... ‘My boy,’ said his mother to him, ‘all your cleverness, your breaking away from old thins, and taking life in your own hands, doesn’t seem to bring you much happiness.’...

‘... Aren’t I well enough off?’

‘You’re not my son. Battle—battle—and suffer. It’s about all you do, as far as I can see.’

‘But why not, my dear? I tell you it’s the best—’...

‘Never mind, Little,’ He murmured. ‘So long as you don’t feel life’s paltry and a miserable business, the rest doesn’t matter, happiness or unhappiness.’...

‘But I want you to be happy,’ she said pathetically.

‘Eh, my dear—say rather you want me to live.’ (*Sons and Lovers*, pp.291-293)

ここで母親が “taking life in your own hands, doesn’t seem to bring you much happiness.” とポールに告げていることから、ポールが自分の人生を自らの手で掴み取ろうとしていること、そのような人生を選び、歩みだしていることを見抜いている母親の姿を読み取ることが出来る。しかし母親は、そのような生き方をしては幸せにはなれないと感じている。よって母親には、自身の生の獲得に向けて歩みを重ねるポールが、まるで「戦いを重ねては負傷し、苦しんでゆく」(Battle—battle—and suffer) 負傷兵のように映る。しかし、そのようにして傷付きながらも一歩一歩確実に足を踏み出すことは、ポールにとっては「最善」(it’s the best—) の在り方そのものである。そのような彼にとって、もはや母親の期待する将来の幸せなど望むものでも何でもなく、大事なはその瞬間を生きることである。よってポールは、「あなたには幸せになって欲しい」(But I want you to be happy) と嘆く母親に、「それよりも、あなたからは生きてと言って欲しい」(say rather you want me to live) と告げる。つまり、ポールは、その瞬間の生が何より大切なことを母親に訴えているのである。

ポールに宿ったこの生きる力を、ムア (Harry T. Moore) は作品の最後を締めくくる以下の一節に見出している。

But no, he would not give in. Turning sharply, he walked towards the city's gold phosphorescence. His fists were shut, his mouth set fast. He would not take that direction, to the darkness, to follow her. He walked towards the faintly humming, growing town, quickly. (*Sons and Lovers*, p.474)

最後の単語 “quickly” に注目したムアは、ポールの豊かな人生の可能性を以下のように述べている。

The last word in *Sons and Lovers* is an adverb attesting not only to the hero's desire to live but also to his deep ability to do so. (Moore p.105)

語源に「生きている」という意味を持つ “quickly” で表現されているポールの足取りは、自らの生を本能的に追求するポールの奥深くに根差すような力 “deep ability” を読者に示していると述べている。

この時ポールがすでに確信のもとに自分の人生を確かめながら生きていたように、人間は可能な限り自由な生の在りようを求めていくべきなのである。束縛されない自由な生は、幸とも不幸ともはかれない強い命のきらめきを放つ。そのことに一人でも多くの人が気付けば、人はより豊かな人生を送ることが出来るという期待を託し、ロレンスは作品を世に送った。この *Sons and Lovers* はまさにそのロレンスの思いが描かれた初めての作品なのである。スピルカ (Mark Spilka) はそのことを以下のような言葉で述べている。

For Lawrence makes first ambitious attempt, in *Sons and Lovers*, to place his major characters in active relation with a live and responsive universe: and this helps to account, I think, for the strange subjective power of the novel. (Spilka p.43)

スピルカは、この作品がロレンスの母子関係を綴った自伝的作品でありながらも “the strange subjective power” を併せ持つ理由に、彼の生涯のテーマ「生」の追求の試みがなされていることを指摘している。

終章

ロレンスの特徴的な思想である「無意識」や「血の交感」は *Sons and Lovers*

の中にその先駆けとして描かれ、主人公ポールの生きる力を引き出すものとしてその意味を発揮している。

自伝的小説と呼ばれるこの作品を書くことによって、ロレンス自身そしてまた世間の人々に求めたものは、まさにポールに仮託して描かれた生の在るべき姿を追求し続ける生き方である¹⁰。そして中橋一夫も述べるように¹¹、それは後々の *The Rainbow* や *Women in Love* (1997) をはじめとする作品の中で、人との結びつきというテーマに発展してゆく。*Sons and Lovers* は紛れもなくロレンス文学の原点といえるのである。

原典

Lawrence, D. H. *Sons and Lovers*, OUP, Oxford World's Classics, 1995.

参考文献

Lawrence, D. H. *The Rainbow*, OUP, Oxford World's Classics, 1997.

Lawrence, D. H. *Women in Love*, Wordsworth Editions, Wordsworth Classics, 1997.

Spilka, Mark *The Love Ethic of D. H. Lawrence*, Indiana University Press, 1999.

Moore, Harry T. *The Life and Works of D. H. Lawrence*, Twayne Publishers, 1951.

Moore, Harry T. (ed.) *The Collected Letters of D. H. Lawrence*, vol.1, Heinemann, 1962, rpt. 1970.

中橋一夫『ロレンス』研究社, 1955

伊藤整, 「汚れなき人間の象」 pp.9ff., 中野好夫編『ロレンス選集別冊』小川書店, 1950

小川和夫「ロレンスの作品」 pp.813ff., 伊藤整・中野好夫訳『ロレンスII』新潮社, 1971

¹⁰ 伊藤整はロレンスの生き方を以下のように述べる。

「反道徳の烙印を押され國外に逃亡することは、この國【イギリス—岩田】のある種作家たちの宿命であつた。あらゆる外國の革命家に隠れ家を與へるこの國は、その内側から生れたものがその社會成立の黙約である良識に不安を與へることを赦さない。これらの危険な兒童の行爲は、両親があまりにも模範的であり、性の衝動に曲線的な拔道を用意してくれてあることに窒息するやうに感ずる。生命の保有者たちは、迂路を嫌ひ直線の爆發をしようとする。生命が馴致されることに、彼等は死を感ずる。そして迂路の外へ飛び出す。」伊藤整 『ロレンス選集別冊』 p.11

¹¹ 「両性関係における自我の対立は『息子と恋人』を書くことによってロレンスにはっきりと意識され、今後の展開に待つべき主題となった」中橋一夫 p.83

- D. H. ロレンス『現代人は愛しうるか—アポカリプス論—』福田恒存訳，筑摩書房，1965
- 阿部知二編『ロレンス研究』英宝社，1955
- 倉持三郎『D. H. ロレンス』冬樹社，1978
- 野島秀勝「快樂原則の彼方で ロレンスとフロイト」pp.218ff.，『現代思想 五月臨時増刊号』青土社，1977
- 朝日千尺『ロレンス研究 —自然—』山口書店，1989
- 原良子「D.H. Lawrence, The Rainbow 論 —Ursula の誕生とその意味—」『聖徳大学研究紀要』短期大学部 第28号(Ⅲ) pp.57-62 (1995)
- 大平章・小田島恒志・加藤英治・武藤浩史編『ロレンス文学鑑賞辞典』彩流社，2002